

COLUMN

サーキュラーエコノミー社会の実現に向けて

高俊興業株式会社 代表取締役社長

高橋 潤 MEGUMU TAKAHASHI

1973年 生まれ
1996年 大学経営学部商学科卒業
1996年 建設会社入社
2000年 高俊興業株式会社入社
2015年 代表取締役社長就任

一般社団法人廃棄物処理施設技術管理協会副会長、
一般社団法人東京都産業資源循環協会常任理事 建設
廃棄物委員長、公益社団法人全国産業資源循環
連合会 業務主任者試験等準備検討委員会委員 人
材育成方策調査検討委員会



毎年4月1日は新卒生の入社時期を迎える。今年も7名の社員を新たに迎入れることができた。コロナ禍の中での学生生活。友達作りも苦労した話を聞いた。入社時の挨拶は、緊張しつつも、夢や希望に満ち溢れていた。立派な社会人となり、今後の環境分野の発展にも一翼を担ってくれる「人材」となってくれることを期待したい。正式配属されてからは多少の失敗はあるものの、積極的に業務に取り組む姿を見ていたら、とても頼もしく思えると同時に、彼ら彼女らの生活を支え、そしてどう育成していけるのか、責任も感じている。一方で、売り手市場の状況の中、総務・人事部は苦労の連続であったと思う。採用活動を通じて、縁を取り持ってくれたメンバーにも感謝の意を表したい。

このような状況の中、先日、経済産業省ならびに環境省の講演を拝聴する機会に恵まれた。両省の共通点として、「サーキュラーエコノミー」が挙げられていた。従来の線型経済社会から、調達・生産・消費・廃棄の流れにそれぞれ付加価値を高めてモノを循環させていく経済へと変えていく

仕組みである。

世界から見れば、日本は資源が限られており、廃棄物を含めた有効活用策が必須である。アメリカならびにEUにおいても循環経済に対する動きが加速化しており、国際動向にも注目した上で、さらなる取り組みが求められる時代となった。

さらに、再資源化品を生成するに当たっては、さらなる品質向上の追及を進めると共に、人と機械設備の調和を図り、効率的に設備を運転させて生成することも考えていかなければならない。

サーキュラーエコノミー社会を実現していくためには「国内と海外」、「各省庁」、「動脈産業と静脈産業」、「再資源化と脱炭素」など、双方の立場や考え方の連携を図り、両輪となって進めていくことが必要不可欠である。

以上のことを入社1・2年目の社員に対し、環境産業への期待感と、業界としての使命感を伝えた。今ある謙虚な姿勢、前向きな考え、素直な心を維持しつつ、能力や知識を身に付けて、立派な「人財」に育ってほしい。